

肺切除術式による1秒量の減少とその回復への影響

柴田 正慶, 北川 実美, 高橋 秀一, 山本 慶和, 松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)

肺切除術後の秒量の減少とその回復には、肺葉切除部位および開胸部位の違い、胸腔鏡併用の有無で差があるのかをみるため、実測秒量と肺血流シンチグラフによる予測残存秒量を比較し検討した。

【対象および方法】対象は、2002年1月～2003年12月の2年間で肺切除術を行い、肺血流シンチグラムと術前後の肺機能検査が行われた40症例（年齢53～82歳：平均68歳）であった。肺血流シンチグラフはガンマカメラ（シーメンス社製）、秒量の測定にはFUDAC-70（フクダ電子社製）を用いた。肺切除術後の実測値と予測値との差〔術後3ヶ月の実測秒量 - 予測残存秒量〕と、1秒量の回復率〔(術後3ヶ月の実測秒量 - 術後1ヶ月の実測秒量) ÷ 予測残存秒量 × 100〕について、肺葉切除部位では上葉と下葉、開胸部位では前腋窩腺と後背部、胸腔鏡併用の有りと無しで差をみた。

【結果および考察】各項目での実測値と予測値との差および1秒量の回復率を表1に示す。実測値と予測値との差では、上葉切除は下葉切除のそれより低値であった（ $P <$

0.001）。これは上葉切除後の空間を埋めるため肺が上方へ移動し、気管支の偏位が起こり易いためと考えられた。胸腔鏡を併用する場合は胸腔鏡無しに比べ皮切長が短く済み、術後疼痛の訴えは軽減されたが、秒量の減少および回復には差がみられなかった。

【結語】実測値と予測値との差では、上葉切除は下葉切除のそれより低値となったが、開胸部位の違い、胸腔鏡併用の有無で差は無かった。秒量の回復率は各項目で有意な差はみられなかった。

0743-63-5611 (内線 8727)

表1：実測値と予測値との差および1秒量の回復率

		肺切部位		開胸部位		胸腔鏡有無	
		上葉	下葉	前腋窩	後背部	有り	無し
実測値と予測値との差	症例数	11症例	15症例	15症例	18症例	12症例	21症例
	最大値	0.25L	0.68L	0.42L	0.68L	0.51L	0.68L
	最小値	-0.35L	0.11L	-0.23L	-0.65L	-0.32L	-0.65L
	平均値	0.00L	0.29L	0.11L	0.11L	0.09L	0.12L
回復率	症例数	8症例	11症例	12症例	12症例	12症例	10症例
	最大値	18.45%	33.15%	18.45%	33.15%	25.23%	33.15%
	最小値	2.90%	-2.04%	2.90%	-2.04%	2.90%	-2.04%
	平均値	9.74%	13.68%	9.81%	13.53%	11.62%	11.36%